

ソビエト連邦における SK (スク) 地名

——その由来と開発——

三 浦 鉄 郎*

I はじめに

ソ連の地名には、接尾語に「SK」のつく地名が多い、特にシベリア地域に最も多く分布する。

ブリタニカ国際地図帳から主たる地名70を選び、その地名由来並びに地名分布と開発との関連をシベリア地域を中心に述べてみたい。

II 帝政ロシア期のシベリア開拓

1 ロシアの南下政策

(1) ロシアの不凍港政策は、ピョートル I 世によって、その基本線が引かれた。特に南方進出は、エカテリナが成功の第一歩を踏み出し、バルカン半島および近東地方へと鋒先を向けるにいたった。

19世紀後半には、太平洋・インド洋へと進出するとともに、更に極東や中央アジアまでその勢力を拡大するなど、世界政局に大きな影響を与えた。

(2) ロシアのシベリア進出

① 黒竜江方面への進出

16世紀末イヴァンIV世は、コサック族の首領エルクマールをシベリアに派遣して、征服と開拓に力を傾注させた。その結果、レナ・エニセイ・オビの各河川流域に毛皮商人の移住や農業移民を送り込むことができた。ピョートル I 世は、17世紀中葉までに、ハバロフを派遣して、バイカル湖以東のシベリアまで進出を企だて、移民の穀物自給が可能であるか否かの調査を行なわしめた。ところが、はからずも1652年清国警備隊と衝突し、1689年にネルチンスク

条約を締結するにいたった。

② カムチャッカ、アラスカへの進出

1689年のネルチンスク条約で、進出を阻止されたロシアは、東方へと方向を転じ1697年には、カムチャッカ半島に進み、エカテリナ II 世の1728年にベーリング海峡にまで到達した。そして18世紀後半にいたって、アラスカへも進出した。

③ ムラヴィヨフの黒竜江沿岸の経略

アレクサンドル II 世は、太平洋とロシア本国とを連絡するためには、黒竜江水路を利用することが最適であると判断し、東シベリア総督ムラヴィヨフを派遣して、1858年までに黒竜江沿岸地域に植民と都市建設を行なわしめた。この際に締結されたのが愛琿条約である。

III シベリア地域への開拓移民

シベリア移民は、1648年～1914年までの266年間は、主に囚人の単族移民があつて、1823年～1898年までの76年間は家族随伴も許可された。1914年からは刑を終えて本国に帰った者の中から再びシベリアに渡って鉱山経営に従事した者も少なくなかつた。

19世紀後半に締結された愛琿条約により、ロシア政府は自由移民を送り込む計画を樹立し、事実200万人計画の基礎に1870年～1890年まで計画を上回る約500万人の農業移民を送った。

* 聖霊女子短期大学

IV 「SK」地名の由来

「SK」は、ロシア語で都市を意味し集落名の語尾に用いられている。地名の出典名は、次の記号で示した。牧 英文(世界地名語源)=M, 中山 襄太(続地名語源辞典)=N, 渡辺光他(世界地名大事典ヨーロッパ・ソ連 I・II・III)=W.

(1) ニジネコリムスク (N izhinecormsk)

シベリア東北地方のコリマ山脈に発するオモロン川沿いの都市で、地名の由来は詳かでない。

(2) スレドネコリムスク (Srednecormsk)

シベリア東北地方のコリマ川沿いの都市で、地名の由来は判然としない。

(3) アレクサンドロフスク=サハリンスキー (Alexandrovsk=Sakhalinski)

サハリンにある都市で、地名は皇帝アレクサンダーに因む。

(4) ヤムスク (Yamsk)

シベリア南東地方の海岸沿いにある都市で、地名はヤム川に因み、漁港であった。

(5) ペトロパブロフスク・カムチャツキー (Petropavlovsk・Kamchatski)

カムチャッカ半島の港湾都市で、探検家ベーリングの率いる聖ペトロ・パウロ両号が地名の由来である (W)。

(6) ニコライエフスク (Nikolayevsk)

アムール川に沿うハバロフスク地方の都市であって、地名はニコライ I 世に因み、この地方における交易地点であった (M)。

(7) コンソモリスク (Komsomolsk)

アムール川沿いの都市で、地名のコムソモルは、レーニン共産主義青年同盟の意味である (W)。1932年に共産青年同盟が成立した。

(8) ハバロフスク (Khabarovsk)

アムール川沿いの都市である。地名の由来は、探検家ハバロフに因んだ (M)。

(9) ベロゴルスク (Balogorsk)

アムール川の支流トミ川に沿う都市で、地名のペロはペオ「白い」の転訛したものか。ゴールはモスコ語の「小川」のことを意味する。白濁の小川のことであろう (W)。

(10) ウスリースク (Ussrilsk)

沿海地方のウスリー川に沿う都市で、地名はウスリー川に由来する。

(11) スレテンスク (Sretensk)

チタ地方のシール川に沿う都市で、地名はキリスト教の祭日スレーテユエの由来する、宗教都市である (W)。

(12) ネルチンスク (Nerchinsk)

チタ地方のネールチャ川に沿う都市で、地名はネールチャ川に因み、当初は河港兼軍事的機能をもっていた (W)。

(13) ベルホヤンスク (Verkhoyansk)

シベリア地方の北部を流下するヤナ川に沿う都市である。地名はロシア語で、ベルは「上流」、ヤンは「ヤナ川」のことである。冬季間における基地であった (M)。

(14) ビリユイスク (Vilyuisk)

レナ川支流のビリユイ川に沿う都市で、地名はビリユイ川に由来する。

(15) オレクミンスク (Orekminsk)

レナ川支流のオリューク川に沿う都市で、地名はオリューク川に由来する。

(16) スターリンスク (Stalinsk)

アムール川地方におけるシベリア鉄道の駅で、地名はスターリンに因む。

(17) キレンスク (Kirensk)

レナ川とキーレンガ川の合流点に立地する河港集落である。地名はキーレンガ川に由来する (W)。

(18) ニシネアングルスク (Nithineangarsk)

バイカル湖頭に立地し、湖上交通の要地として有名である。

(19) アンガルスク (Angarsk)

バイカル湖の湖脚に立地し、湖上交通上の重要な都市である。地名はバイカル湖に流入するアンガラ川に由来する。

(20) ニジウジンスク (Nizhiudinsk)

イルクーック地方のウーダ川に沿う都市で、地名のニージーは「下方」の意味である。つまりウーダ川の下流ということである (W)。

(21) カンスク (Kansk)

クラスノヤルスク地方のカーン川に沿う都市で、地名はカーン川に由来する (W)。

(22) エニセイスク (Yeniseisk)

エニセイ川上流部にある都市である。地名はエニセイ川に由来する。

(23) クラスノヤルスク (Krasnoyarsk)

エニセイ川上流部に位置する都市で、1628年ロシアが建設したクラスノヤルスク砦を起源とする。

地名は、ロシア語のクラスノは「赤い」または「見晴らしのよい」の意。ヤルは「絶壁」のこと。結局見晴のよき要害地のことである。革命後は「赤い」の意をもって革命精神を表示している (M)。

(24) ミヌシンスク (Minusinsk)

クラスノヤルスク地方のエニセイ川沿いの都市であるが、地名の由来は不明である。

(25) ノリルスク (Norilsk)

エニセイ川下流部にある都市である。地名のノリは「淵」のこと。モンゴル語では「湖」を意味する。エニセイ川下流部にある淵のことである。1937年にニッケルコンビナートが建設された (M)。

(26) ツルハンスク (Turkhansk)

エニセイ川とツンクスカ川との合流点に立地する落合集落である。

(27) ノギンスク (Noginsk)

モスクワ東方 35 km 地点、クリヤージマ川に臨みもとは「ボゴローック」と呼称したが、ソビエトの政治家ノーギンを記念して地名を「ノギンスク」と

改名した (W)。

(28) アンゼロスゼンスク (Anzhero Sudzhansk)

オビ川上流にある都市で、877年シベリア鉄道建設の際石炭採掘の中心地となった。地名の由来は判然としない。

(29) レニンスク (Lenninsk)

アルメニア地方の都市で、もとニコライ I 世の妃アレクサンドラの名を地名とした(1837年)。その後1924年共産党政権創立者の一人であるレーニンの死後彼の名を後世に伝えるため、地名をレーニンと改めた (M)。

(30) プロコフィフスク (Prokopjevsk)

ケーメロプオ地方のアベ川に沿うて敷設された鉄道駅であり、またクズネック炭田の中心地である。地名の由来は詳かでない。

(31) ビースク (Biysk)

アルタイ地方のカトウーン川とビーヤ川との合流点に立地する都市である。地名はビーヤ川に因む。

(32) コルノアルタイスク (Kornoaltaisk)

アルタイ地方のマイマ川とカウトーン川との合流点に立地する都市である。地名はアルタイ人に因む (W)。

(33) アレイスク (Alesk)

アルタイ地方のアレー川に沿う都市で、地名はアレー川に由来する。現在はバター、チーズ、砂糖の製造の中心である (W)。

(34) ルブツォフスク (Rubtsovsk)

アルタイ地方のオビ川支流ナレ川に沿う鉄道駅の都市である。地名の由来は詳かでない。

(35) セミパラチンスク (Semipalatinsk)

カザフ地方の都市で、1778年要塞として建設された。地名のセミはロシア語で「七ツ」の意。パラタは「宮殿」のこと。つまり七ツの宮殿の都市ということになるが、宮殿が七ツあったか否かは判然としない (N)。

(36) レニノゴルスク (Leninogorsk)

カザフスタン地方の都市である。ウリバー川上流部に立地する。18世紀末に鉄山発見者リーデルに因んで地名をリーデルと呼称した。1941年に現名となる。地名のレニは「レーニン」、ゴロは「山」のことで、レーニンの山地を意味する(N)。

(37) ウストカメノゴルスク (Ustkamenogorsk)

カザフスタン地方の都市で、1720年に建設されたウスティカーメンナヤ城塞が地名の由来である。

都市は、ウリバ川とイルトウイシ川との合流点に立地し、現在は金属冶金工業の一大中心地となっている(W)。

(38) ノボシビルスク (Novosibirsk)

オビ川に沿う都市である。1894年シベリア鉄道とオビ川との交点にグゼウカ村が作られた。1903年にノボニコラエフスク「新ニコラエフ市」と政称した。1926年に現名となる。地名のノボは「新」、シビルは「シベリア」の意で、新しいシベリアの都市という意味である(N・M)。

(39) バラビンスク (Barbabinisk)

ノボオシビルスク地方の都市で、バラビンスクステップに立地する。19世紀にシベリア鉄道建設のために成立した。金属加工業が発達している。

バラビンスクステップが地名の由来をなす(W)。

(40) タタルスク (Tatarsk)

オビ川支流のイルチン川に沿う都市で、地名のタタはタタール人の民族名である。

(41) オムスク (Omsk)

シベリア平原におけるイルチシ川の支流オム川に臨み、イルチシ川の港として建設された。オムはロシア語で「ゆったり」の意である。地名はオム川に由来する。

(42) ハンチマンシスク (Hantimansiysk)

オビ川とイルチシ川との合流点に立地する都市で、地名はハントウ人とマミン人の民族名に由来する。

(43) トボルスク (Toborsk)

1857年デューメン地方のトボール川の船着場として建設された都市である。地名はトボール川に由来する(W)。

(44) スベルドロフスク (Sverdlovsk)

ウラル山地東斜面にある都市で、1721年要塞が設けられた。1723年エカテリーナI世を記念してエカテリンプルグとした。1924年にボルシェビエキのスベルドフを記念して現地名とした。

(45) ヤルトロフスク (Yalutorvsk)

デューメン地方の都市で、トボール川沿いに立地する。1639年に流刑地として建設され、12月党員が送られた。地名はトボール川に因む(W)。

(46) ペトロパプロフスク (Petroprvlosk)

シベリア平原南部のイルチシ川沿いに立地する都市である。地名はキリスト教徒ペテロ、パウロに由来する。ロシア正教の聖地でペトロパプロ教会の所在地である。1752年に要塞が築造された(M)。

(47) チリャビンスク (Chelyabinsk)

ウラル山地南部の都市で、バシキール人によってチエリヤビ村がつくられ、1736年にはカザフ軍の前哨所が設けられた。チエリヤビはバシキー語で「桶、鉢」の意という。地名はチエリヤビ村に由来する(M)。

(48) ビルスク (Birsk)

バシユキール地方の都市で、ビール川支流のペーラヤ川沿いに立地し、1663年に要塞が建設されたのが起源である。地名はビール川に因む(W)。

(49) マグニドゴルスク (Magunitogorsk)

1950年ウラル地方に建設された金属工業コンビナートである。地名のマグニドは「磁石」、ゴルは「山地」の意である(N)。

(50) オルスク (Orsk)

1735年にオレンブルグ城塞が造られ、1739年には城塞が西方へ移転してから、城塞跡をオルスカヤと呼ばれた。現名は河川名のオーリに由来する(M)。

(51) アラリスク (Alalsk)

アラル海に臨む都市で、地名のアラリはトルコ語の「島」で、アムダリアのデルタのことであろう(W)。

(52) ノボカザリンスク (Novokuzlinsk)

アラル海に注ぐシルリダリア河口に立地する都市である。地名のノボは「新」で、カザリンは「皇帝名」である。

(53) アクチュビンスク (Aktyubinsk)

ウラル川上流部に立地し、1869年に要塞が築造された。地名のアクチュビは「白い丘」の意で、白い丘の都市ということである(M)。

(54) ウラリンスク (Uralsk)

ウラル川沿いの都市で、1613年にコサックの要塞が構築された。1667年ブガチョーフの暴動地であったことから、エカテリナII世は、それを忌みウラリンスクと改名した。地名はウラル川に由来する(M)。

(55) ウリヤノフスク (Ulyanovsk)

ボルガ川上流に立地する都市で、旧名シンピルスクと呼称したが、1924年にソ連共産党の創設者ウリヤノフ・レーニンに因んで改名した。レーニンは1870年にこの地に生れ、家族を居住された(M)。

(56) サランスク (Saransk)

モルドバア地方のインサル川に臨む都市で、1614年に国境の要塞として建設された。地名のサランは「塩類泉」のことである(W)。

(57) イゼブスク (Izhevsk)

ウラル山地西側を流れるイージュ川に臨み、1700年に成立した都市である。地名は河川名に由来する。1760年には冶金工場が設けられた。

(58) ミチューリンスク (Michurinsk)

ドン川上流に立地する都市である。地名はヤロビ農法の発明者ミチューリンに由来する。

(59) クルスク (Kursk)

ドン川とボルガ川の間地域におけるトウスカリ川、クラ川がセイム川に合流する地点に立地する都市である。10世紀にキーフ・ロシアの要塞であった。

地名のクルはトルコ語の「湖」にあたる。つまり湖のある都市のことである。

(60) ノボロシースク (Novorossisk)

黒海のツエーメス湾(ノボオロシースク湾)岸に1838年に軍事拠点として建設された都市である。

地名は湾名のノボオロシースクに由来する。

(61) スモレンスク (Smolensk)

ドネツ川上流部にある都市で、付近は松柏類の繁茂地域として著名である。地名のスモールは「タール」のこと。レンスクは「燃える都市」の意である。したがって松脂が求めやすい都市ということである(N)。

(62) ビデブスク (Vitebsk)

西ドビナ川に沿う都市で、かつては船着場であったが、今は繊維工業の中心地である。地名は西ドビナ川の支流フィティバ川に因む(W)。

(63) ミンスク (Minsk)

白ロシアのスプィースロチ川に沿う都市で、旧名をメネスクと呼称した。メネスクはロシア語で「交換の都市」という意である。ギリシアとの交易が盛んであった。

(64) ドニエプロペトロフスク (Dnepropetrovsk)

ドニエプル川下流に立地する都市で、1635年にコサック要塞が建設されたのが基となる。1786年にエカテリナII世に因んだ名エカテリナ・スラブと名付けられたが、1796年パブラ女帝がノボロシースクと改名した。1802年アレクサンドルI世が旧名に復した。1926年から現名となる。地名のドニエプロは河川名、ペトロフスクはペトロフスキ(ウクライナ共和国の中央執行委員会議長)名である(W)。

(65) ベロモリスク (Belomorirsk)

カレーリア地方の白海に臨む都市である。地名のペロはペール「白い」の転訛か。モリスクは共産主義青年同盟の意だから、白海に面する共産主義青年同盟の一拠点ということか。

(66) キーロフスク (Kirovsk)

コラ半島中央部のネパァー川に沿う都市で、地名は、政治家キーロクに因む (W)。

(67) アルハンゲルスク (Arkhangelsk)

北ドビナ川河口に立地する都市である。10世紀に北方民族が定住し、彼等の教化を目的にミハイラ・アルハンゲラ修道院が建設された。地名は天使長アルハンゲルに由来する (M)。

(68) アルテヨーモフスク (Artoomovsk)

ウクライナ地方のバフムート川沿いの都市で、地名は革命家アルテョームに因む。

(69) アレクサンドロフスク (Alepsandrosk)

コラ半島北部にある都市で、地名は皇帝アレクサンダーに因むが、I・II・IIIのいずれであるかは判然としない。

(70) ドニエプロジルシンスク (Dneprodzervhinsk)

ドニエプル川に沿う都市で、地名は河川名と政治家ジェルジンスキに由来する。

以上個々の地名由来について述べたのであるが、立地上からみると河川沿いが最も多い。地名の由来上からでは、河川名と人物名が多い。

河川名には、ペロゴルスク、ウスリースク、アングルスク、オレクミンスク、キレンスク、ネルチンスク、ニジウジンスク、カンスク、エニセイスク、ノリスク、ビースク、アルスク、オムスク、トボリスク、ヤルトロフスク、ピルスク、オルスク、ウラルスク、イゼツスク、ドニエプロ・ジルシンスク、ビデブスク、ミンスク、ドニエプロ・ペトロフスクの23を数え、その割合が32.35%を占める。

人物名には、ペトロバプロフスク、カムチャッキー、ニコライエフスク、コンソモリスク、ハバロフスク、スターリンスク、ノギンスク、レニンスク、コルノアルタイスク、レニノゴルスク、スベルドロフスク、ペトロバプロフスク、ノボカサンスク、ウリヤノフスク、ミチューリンスク、ドニエプロ・ペトロフスク、キーロンフスク、アルハンゲルスク、

アルテヨーモフスク、アレクサンドロフスク、ドニエプロジルシンスク、アレクサンドロフスク・サハリンスキーの21を数え、その割合が30%を占める。人物名に由来する地名は、ロシア帝政期における功績顕著な皇帝を記念したものやロシア革命に関連するレーニン、ノーギン、ベルドフ、キーロフなどの共産主義者、全連邦レーニン共産主義青年同盟を記念したものである。これらが、ソ連の国柄を示す地名的特色である。宗教上では、ロシア正教に因むペテロ、パウロの記念地名がある。

機能面では、要塞に関係する地名の存在からシベリア開拓の一端を知り得る。

V 「SK」地名の分布とその開拓 (第1図参照)

「SK」地名の分布は、次のように分類することができる。

第1は、河川沿いの地域に分布する地名。

第2は、山地沿いの地域に分布する地名。

第3は、海岸沿い地域に分布する地名。

第1の河川沿いの地域では、シベリアのオビ川、エニセイ川、レナ川、アムール川などの流域に多く分布し、ヨーロッパソ連にあっては、ウラル川、ボルガ川、ドン川、ドニエプル川などの流域に分布する。いずれも大平原を形成した大河川である。以上の河川流域は、コサック族によって開拓が進められたところであることはいうまでもない。

その要因は、耕地化しやすい場所であったこと、飲料水を得るのに最適な場所であったこと、河川のもつ唯一の交通手段を利用することができたことなどがあげられる。特にボルガ川、ドン川、ドニエプル川の三流域は、コサック族の発祥地であるから、シベリアよりも開拓が早く行なわれた。

第2の山地沿いの地域では、シベリアのサヤン山脈におけるビースク、レニンスク、レニノゴルスク、プロコフィエフスク、ウストカメノゴルスク、セミパラチンスクなどが代表的である。次にシベリアと



- | | | |
|--------------|---------------|----------------|
| 1 ニジネコリムスク | 23 クラスノヤルスク | 47 チリヤビンスク |
| 2 スレドネコリムスク | 24 ミヌシンスク | 48 ビルスク |
| 3 アレクサンドロフスク | 25 ノリルスク | 49 マグニドゴルスク |
| サハリンスキー | 26 ツルハンスク | 50 オルスク |
| 4 ヤムスク | 27 ノギンスク | 51 アラリスク |
| 5 ペトロバプロフスク | 28 アンゼロスゼンスク | 52 ノボカサリンスク |
| カムチャッキー | 29 レニンスク | 53 アクチュビンスク |
| 6 ニコライエフスク | 30 プロコフィフスク | 54 ウラリスク |
| 7 コンソモリスク | 31 ビースク | 55 ウリヤノフスク |
| 8 ハバロフスク | 32 コルノアルタイスク | 56 サランスク |
| 9 ペロゴルスク | 33 アレイスク | 57 イゼブスク |
| 10 ウスリースク | 34 ルプツォフスク | 58 ミチューリンスク |
| 11 スレテンスク | 35 セミパラチンスク | 59 クルスク |
| 12 ネルチンスク | 36 レニノゴルスク | 60 ノボロシースク |
| 13 ベルホヤンスク | 37 ウストカメノゴルスク | 61 スモレンスク |
| 14 ビリュイスク | 38 ノボシビルスク | 62 ビデブスク |
| 15 オレクミンクス | 39 バラビンスク | 63 ミンスク |
| 16 スターリンスク | 40 タタルスク | 64 ドニエプロベトロフスク |
| 17 キレンスク | 41 オムスク | 65 ペロモリスク |
| 18 ニシネアンガルスク | 42 ハンチマンシスク | 66 キーロンスク |
| 19 アンガルスク | 43 トボルスク | 67 アルハンゲリスク |
| 20 ニジウジンスク | 44 スベルドロフスク | 68 アルテヨーモフスク |
| 21 カンスク | 45 ヤルトロフスク | 69 アレクサンドロフスク |
| 22 エニセイスク | 46 ペトロバプロフスク | 70 ドニエプロジルシンスク |

第1図 ソビエト連邦におけるスク地名の分布

ヨーロッパソ連との国境をなすウラル山脈地域では、マグニドゴルスク、スベルドロフスク、オルスクなどがあげられる。以上の地名は、開拓進渉のために設けられた要塞か、または鉱山開発に関するものである。鉱山開発は、19世紀以後であり、特にシベリアの場合は、処刑を終えた者が再度移住として開発に従事したものが少なくない。彼等は主として経営面を担当し、採掘は囚人の労働力に依存した。

第3の海岸・湖岸沿いの地域では、白海に臨むベロモリスク、コラ半島のアレクサンドロフスク、極東におけるシエレホス湾岸のヤムスク、アレクサンドロフスク・カムチャッキーなどは内陸性のソ連にとっては出口の意義が深いといえる。その他アラル海に面するアラリスク、ノボカサリンスクがある。

アレクサンドロソフスク・カムチャッキーは、ソ連年来の不凍港政策の一具現とみられることができる。

VI むすび

1. 地名の接尾語「SK」は、集落名の語尾に用いられ、村が都市へと発達したことの現われである。

2. 「SK」地名の分布は、全ソ連領内にみられるが、特にシベリアに密である。その理由は、ロシア帝政期における不凍港政策に求めることができる。

3. さらに分布状態を地域的にみると、河川沿い、山地沿い、海岸・湖沿いの三地域となり、それぞれ開発の方向と内容を示唆するものといえる。

4. 地名の由来は、河川名、人物名、宗教名に特色がある。

(1986年12月15日受付)

(1987年2月13日受理)

参考文献

- 1) 牧 英夫 (1980) : 『世界地名の語源』自由国民社, p. 78~185.
- 2) 山中裏太 (1979) : 『続地名語源辞典』校倉書房, p. 204~312.
- 3) 渡辺光・木内信蔵・他 (1976) : 『世界地名大事典』 I・II・III, 朝倉書店, p. 1~1596.
- 4) フランク・B・ギブー (1974) : 『ブリタニカ国際地図帳』 TBSブリタニカ, p. 66~79.
- 5) フランク・B・ギブー (1974) : 『ブリタニカ大百科事典 (国際)』 TBSブリタニカ, 1~5.
- 6) 原 随園・井上智勇 (1952) : 『西洋史辞典』創元社.